

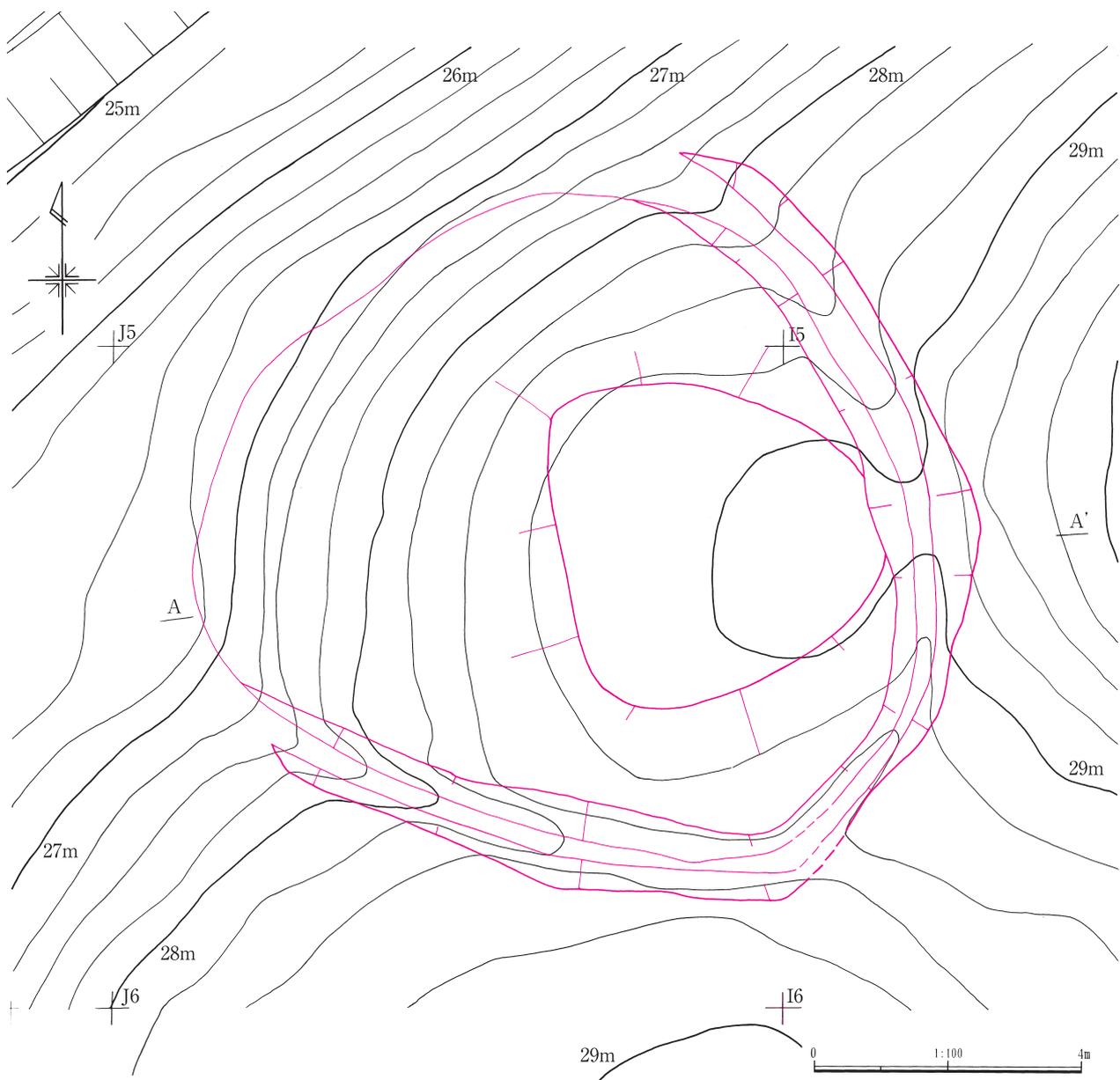
副葬品がほとんど残されていないことから、本古墳の築造時期を決定するのは困難である。しかしながら、断片的に出土した遺物を積極的に関連づけると、築造および埋葬は、古墳時代後期後葉後半からいわゆる終末期にかけて(田辺編年TK209～TK217型式並行)行われた可能性が考えられる。

29号墳 (第59～61図、表4、PL.55)

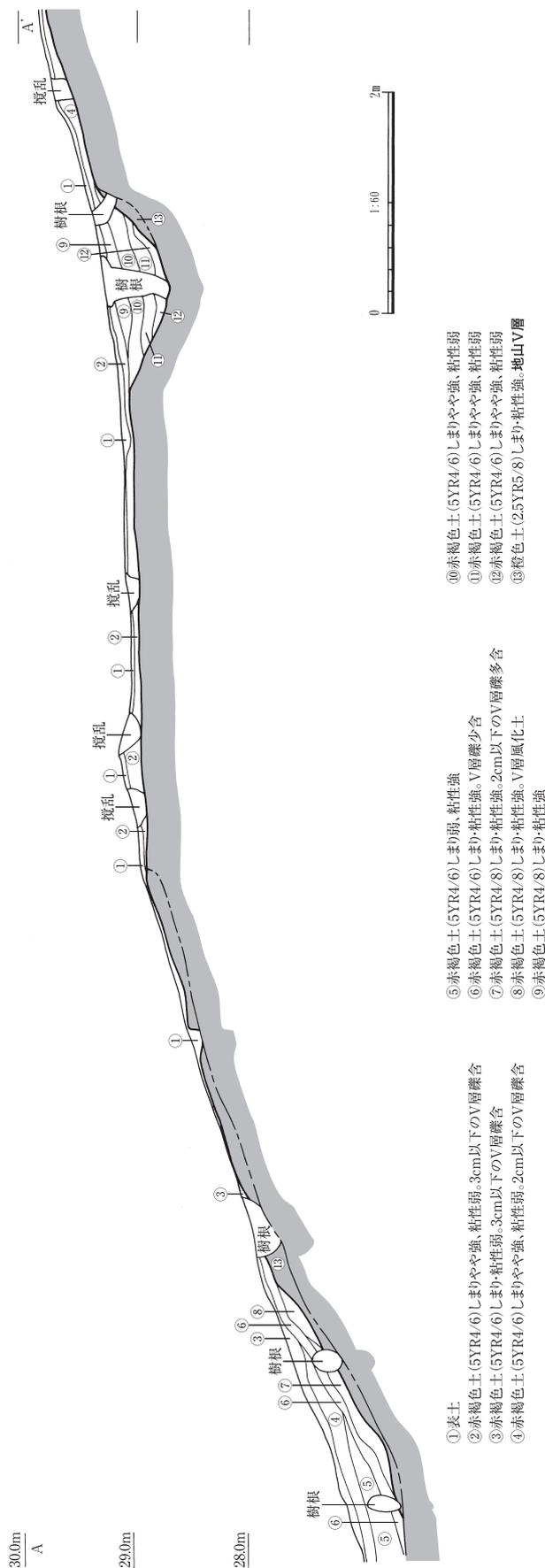
位置と現況

H4・5、I4・5グリッド、西側に傾斜する標高29mの尾根部に位置する。調査前は、微かな高まりを認識できたに過ぎず、当初は古墳として認識していなかった。21号墳の周溝を検出中、北側に向かって弧を描く溝を確認したため、新たに古墳として調査をおこなった。

近接して東側に22号墳、南側に21号墳が位置することから、それらを意識して狭小な場所に築造されたものと推測される。



第59図 29号墳墳丘平面図



- ①表土
- ②赤褐色土(5YR4/6)しまりやや強、粘性弱、3cm以下のV層礫含
- ③赤褐色土(5YR4/6)しまり粘性弱、3cm以下のV層礫含
- ④赤褐色土(5YR4/6)しまりやや強、粘性弱、2cm以下のV層礫含
- ⑤赤褐色土(5YR4/6)しまり弱、粘性強
- ⑥赤褐色土(5YR4/6)しまりやや強、粘性強、V層礫少含
- ⑦赤褐色土(5YR4/8)しまり粘性強、2cm以下のV層礫多含
- ⑧赤褐色土(5YR4/8)しまり粘性強、V層風化土
- ⑨赤褐色土(5YR4/8)しまり粘性強
- ⑩赤褐色土(5YR4/6)しまりやや強、粘性弱
- ⑪赤褐色土(5YR4/6)しまりやや強、粘性弱
- ⑫赤褐色土(5YR4/6)しまりやや強、粘性弱
- ⑬橙色土(2.5YR5/8)しまり粘性強、地山V層

第60図 29号墳墳丘土層断面図

調査経過

近接する21号墳と22号墳との新旧関係を把握するために、それぞれの古墳間にトレンチを掘削し、土層の堆積状況を確認した。その結果、本古墳は22号墳の流土堆積後に築かれていることと、本古墳が21号墳を切っていることが判明したため、これらに先行して本古墳の調査を開始した。ベルトは、尾根鞍部上の古墳を通して設定した東西ベルトに重ねて1本を、21号墳の南北ベルトを北に延長してもう1本を設定した。その後、表土・流土を除去し、墳丘・周溝を検出した。盛土および主体部は検出されなかった。

墳丘

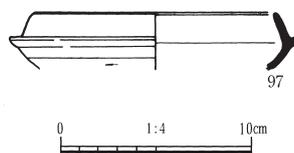
表土・流土を除去した段階で周溝を検出した。盛土は確認できず、墳丘全面に赤褐色土(地山V層)が認められた。そのため、埋葬施設および盛土は削平を受けたか、流失した可能性が高い。周溝は幅1.0m、深さ0.4～0.6mを測り、22号墳墳端西側、21号墳新段階盛土を切る。残存する規模は東西11m、南北9.5mを測る、やや歪んだ円形を呈する。高さは西側の傾斜変換点を墳端とした場合、約2mを測る。

遺物出土状況

遺物は、墳丘北側から西側かけての斜面に堆積した流土中から須恵器片などが数点出土した。そのうち須恵器坏身94を図示した。ほかに、本墳東側から須恵器甕片が、周溝埋土上層から棒状鉄製品片が出土しており、それぞれ22号墳出土遺物(第32図54・F10)と接合している。

出土遺物

図示した94は、立ち上がりが短く内傾する須恵器坏身である。底部から受け部までの高さは残存状況から2cm程度と考えられる。口縁部から底部



第61図 29号墳墳丘出土遺物

付近の小さな破片であるため径の復元に不安は残る。遺物の特徴から、田辺編年MT15型式並行と考えられる。

本墳の築造時期の比定は、流土中出土の遺物しかないため難しい。97は本古墳に伴う可能性は低く、ほかの古墳に伴う可能性が高い。また、本古墳は21・22号墳を切っているため、本古墳は21号墳・22号墳よりも新しい時期に築造されたと考えられる。よって、本古墳は古墳時代後期後葉以降に築造されたと考える。

30号墳(第62・63図、表4、PL.56・57・77)

位置

調査地東部のC2・D2グリッドに位置し、丘陵鞍部から丘陵北斜面に向かって傾斜するやや急な斜面に立地する。南には24号墳が近接しており、本古墳の周溝南端が24号墳の周溝北端を切っている。

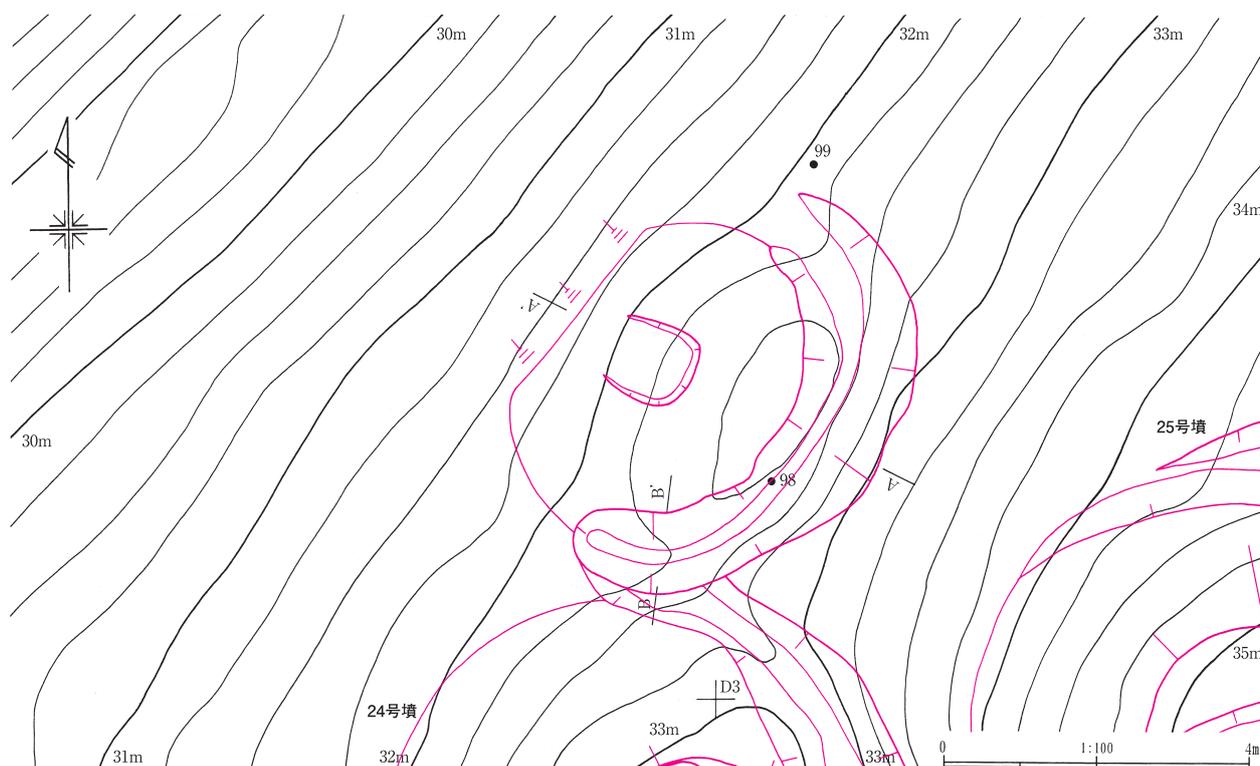
調査経過

調査前の地表面では古墳の存在は全く認識できず、24号墳の墳丘検出中に本古墳の周溝を確認した。その段階では既に本古墳上に堆積していた表土・流土は除去していたが、その堆積は24号墳北斜面とほぼ同じである。周溝検出後、墳丘主軸上と24号墳・30号墳の中心を結ぶ軸上に、周溝埋土の観察用ベルトを設定し、周溝埋土を掘り下げた。周溝を完掘後、主体部の調査を行った。

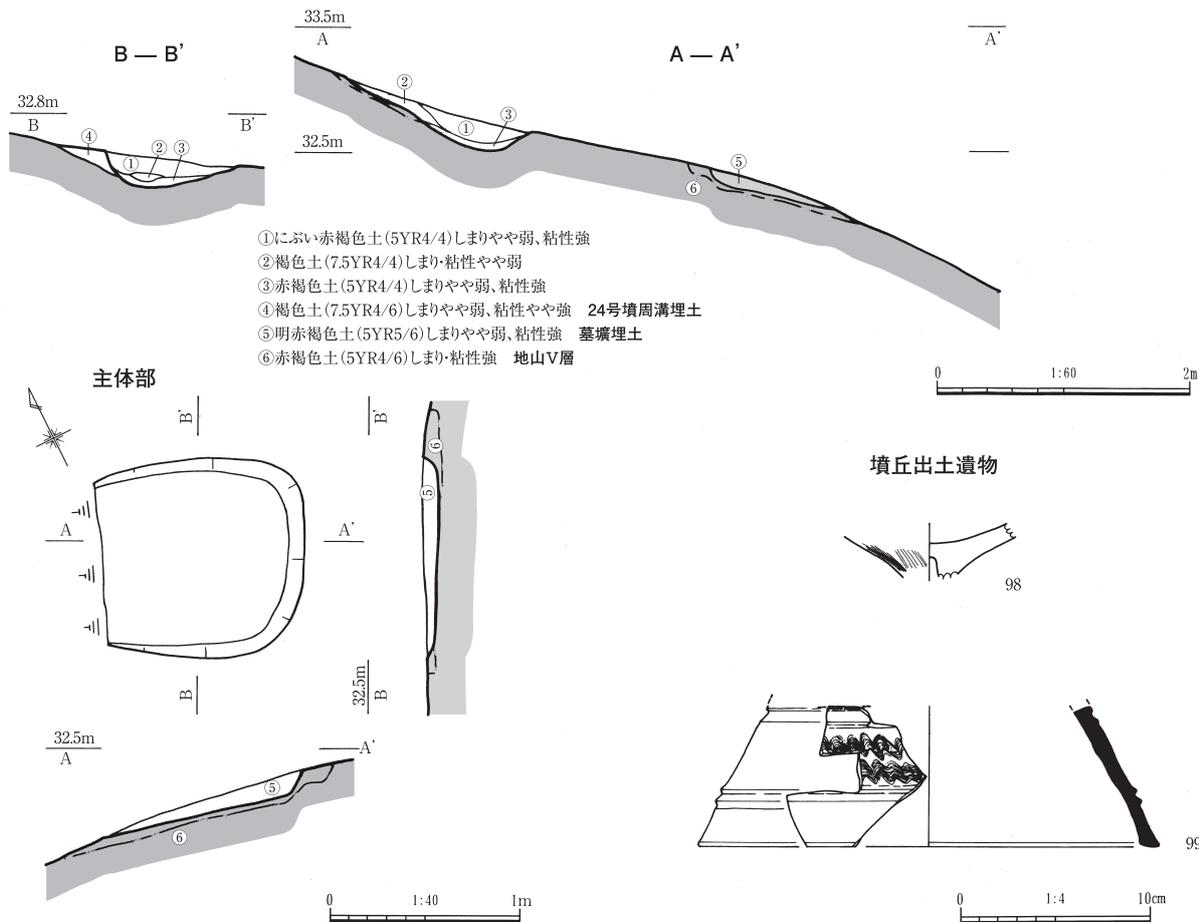
墳丘

墳丘は遺存状態が悪く、築造当初の姿をとどめていない。現況では、南東側に馬蹄形の周溝をもつ円墳で、南東-北西軸が周溝を含めて4.5m、北東-南西軸が周溝を含めて5.8mを測る。墳丘の最高点が標高32.62mで、西側墳端と墳頂の比高差が約0.9m、周溝底と墳頂の比高差が約0.2mである。

墳丘は斜面の高所側に馬蹄形の周溝を掘削することで築かれている。この排出土を利用して盛土を



第62図 30号墳墳丘平面図



第63図 30号墳墳丘土層断面図・主体部および墳丘出土遺物

行っていた可能性が高いが、調査では盛土を確認しておらず、現存する墳丘面はすべて地山である。

主体部

墳丘のほぼ中央で1基の墓壙を確認した。残りが非常に悪く、掘り込みの上部は大部分が流失してしまったと考えられるほか、南西側では墓壙底面も失われている。

墓壙は方形で、長軸残存長が約1.1m、短軸が約1.1mである。主軸の方位はN-63°-Wで、墳丘の、南東-北西軸とほぼ平行する。底面には長軸方向の傾きがあり、北西端部より南東端部の方が20cmほど高いが、北西側の底面が流失していて本来の高さを保っていない可能性がある。また、墓壙内の埋土も埋葬時の埋め土ではなく、流入土と置き換わってしまった可能性も考えられる。墓壙内からは遺物は出土していない。

墳丘出土遺物

流土および周溝掘削中に土師器片・須恵器片が数点出土している。このうち図化可能なものを2点掲載した。98は周溝内から出土した土師器高坏坏部片で、古墳時代中期または後期のものと考えられる。99は周溝北端部付近から出土した須恵器器台脚部片である。破片上端には透かし孔の下端面が見られるが、透かしの形態は不明である。外面は稜と沈線で段を画し、そこに二列の波状文を施す。田辺編年TK208～TK23型式に相当するものと考えられる。

これらの遺物はその出土状況から、本古墳に伴う可能性は低いと思われる。したがって、本古墳の築造時期は出土遺物からは判断することができない。

2 竪穴住居跡

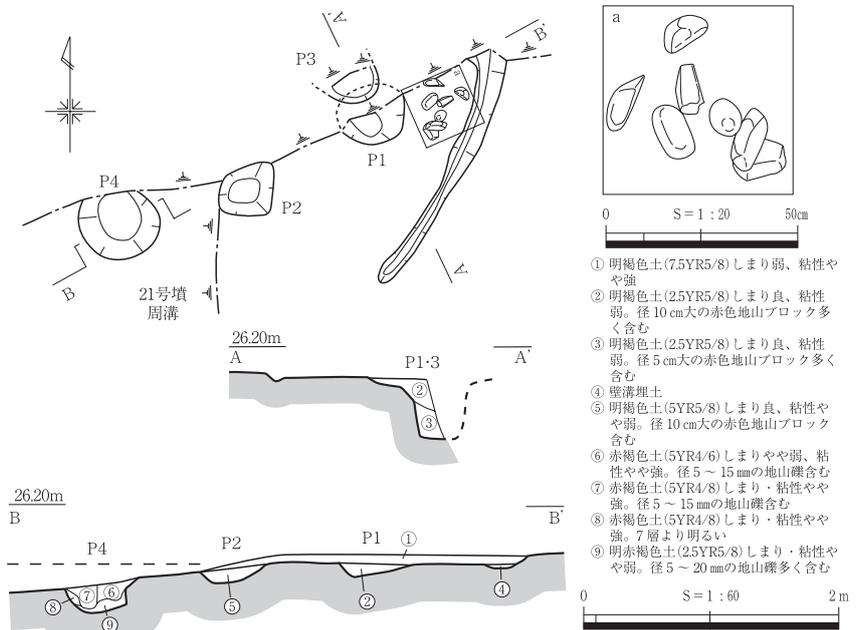
竪穴住居跡 1 (第64図、PL.59)

J6グリッドの21号墳西側斜面部で、古墳盛土下面で検出した。上部は段状遺構3によって大きく削平されており、床面から10cm程度の高さしか残存していなかった。また、西側は21号墳古段階の西側周溝に切られているほか、北側半分は地山まで大きく掘削してしまったため、残存状態が非常に悪い。全形は不明だが、壁溝と柱穴の存在から竪穴住居跡と認識した。

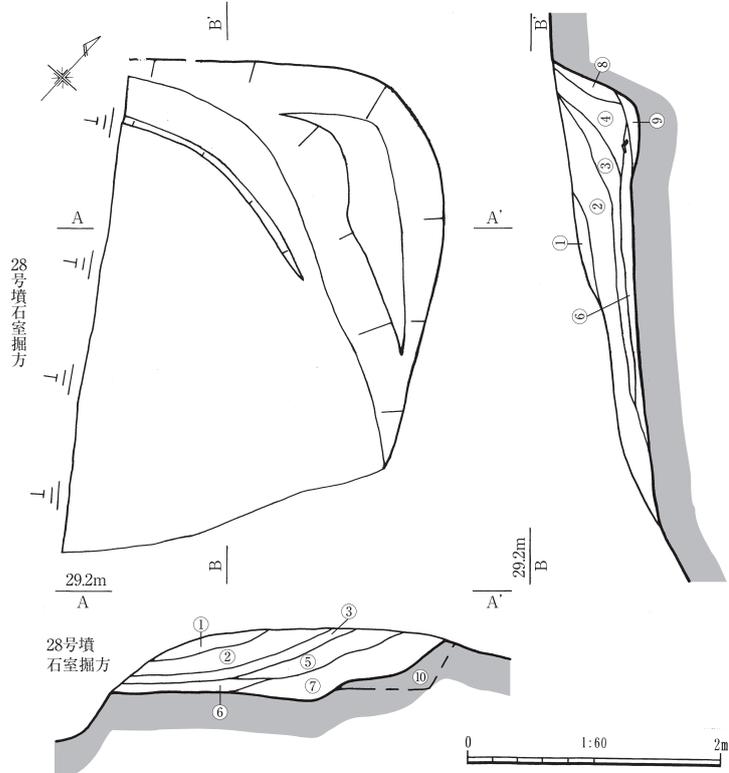
埋土は最下層1層のみ確認している。埋土除去後、遺構東側で周壁溝、中央付近でピット4基(P1～P4)を確認した。周壁溝は幅約20cm、深さ約5cmで、南側で途切れている。P1・P2は深さ10cm前後と浅いが、P3・P4は本来の掘り込み面からの深さが約50～60cmあるので、柱穴の可能性がある。P1とP3は重複しており、P1がP3の上部を切っている。

床面からは、8個の自然石が集積された状態で出土した。自然石は円礫～亜円礫で、長さ11～18cm(平均15cm)、幅7～9cm(平均8cm)、重さ1020～1260g(平均1160g)と、敲き石などに利用可能な大きさである。石材は安山岩6点、花崗岩2点である。ほかに遺物は出土していない。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、21号墳古段階以前かつ段状遺構3以前のものである。



第64図 竪穴住居 1



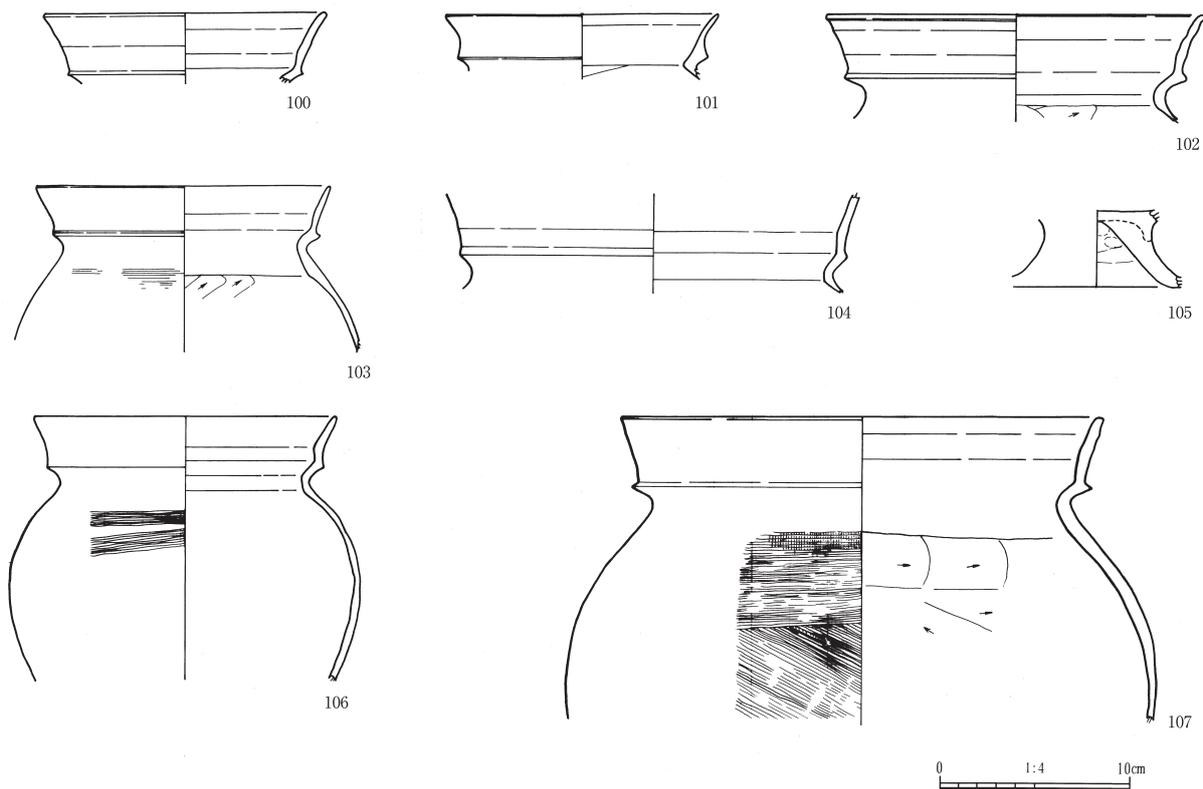
- ① 明赤褐色土(2.5YR5/8)しまり・粘性強
 - ② 暗赤褐色土(5YR3/2)しまり弱、粘性強
 - ③ におい・赤褐色土(5YR4/4)しまり・粘性やや弱
 - ④ 明赤褐色土(5YR5/6)しまり・粘性やや弱
 - ⑤ 明赤褐色土(5YR5/8)しまりやや強、粘性強
 - ⑥ 赤褐色土(2.5YR4/6)しまりやや弱、粘性弱
 - ⑦ 明赤褐色土(5YR5/6)しまりやや強、粘性強
 - ⑧ 赤褐色土(5YR4/8)しまり・粘性弱
 - ⑨ 赤褐色土(2.5YR4/6)しまりやや弱、粘性弱
 - ⑩ 赤褐色土(5YR4/8)しまり強、粘性弱。
- 地山(V層)

3 段状遺構

段状遺構 1 (第65・66図、表4、PL.60・61・86・87)

丘陵鞍部から南斜面への傾斜変換部

第65図 段状遺構 1

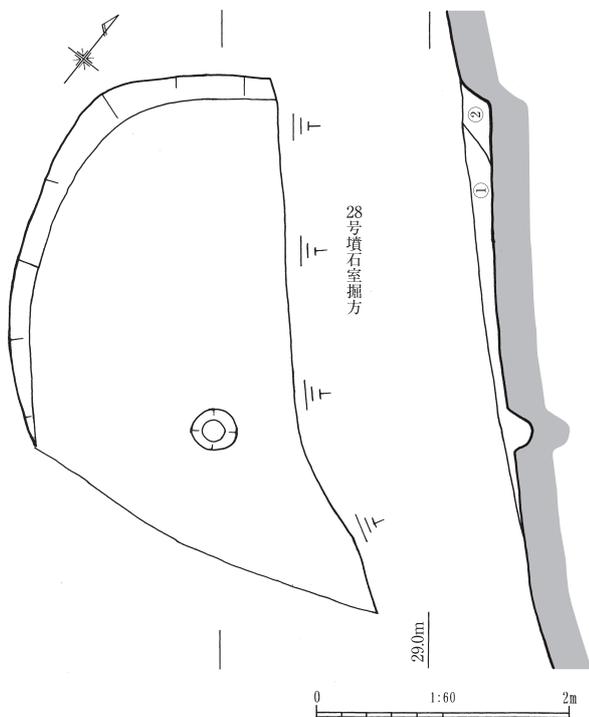


第66図 段状遺構 1 出土遺物

にあたるF5グリッド南西部に位置する。本遺構は28号墳の盛土の下から検出しており、28号墳石室の掘り方によって遺構の西半分が削平されている。なお、28号墳の石室掘り方をはさんだ西側には、同じく28号墳の盛土下で段状遺構2を検出している。

本遺構は斜面を「コ」の字形に段切りして形成しており、残存部で4.0m×2.6mの方形プランをもつ。検出面からの深さは北壁際に60cmほどである。底面には北壁際に幅30cm深さ数cmほどの壁溝が見られる。土層断面の1層は28号墳の盛土であるが、2層以下はすべて自然堆積で、北側および東側から流入したものである。

遺物は床面直上付近を中心に土器が多数出土した。100・101・105は埋土上層の2層から、103・106は床面直上から、102・104・107は周溝内からそれぞれ出土している。106や107は、それぞれの個体が床面・周溝内から良くまとまった状態で出土しており、接合できなかった破片も多数あることから、ほぼ完形に近い状態で遺棄または投棄されていたものと考えられる。



①暗褐色土(10YR3/3)しまり・粘性弱
②明褐色土(7.5YR5/6)しまり・粘性弱

第67図 段状遺構 2

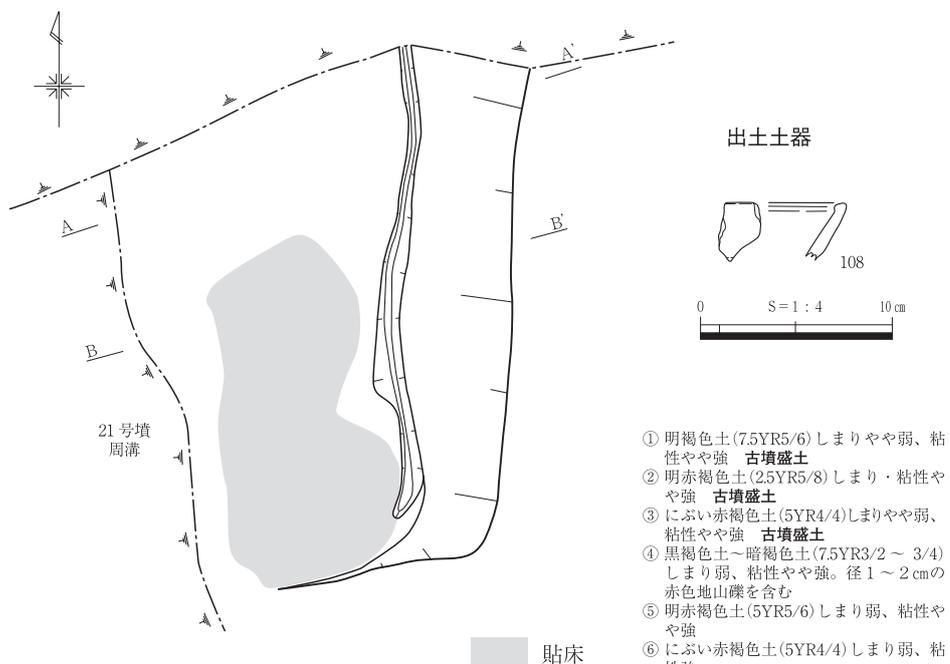
これらの土器は弥生時代終末期から古墳時代初頭のものと考えられる。これらがおおむね遺構の機能していた時期を示すものと考えられるが、なかでも106・107の出土状況を重視すれば、古墳時代前期初頭に廃絶された可能性が高いと考えられる。

段状遺構 2 (第67図、PL.61)

丘陵鞍部から南斜面への傾斜変換部にあたるG6グリッド北東部に位置する。本遺構も段状遺構1同様、28号墳の盛土の下から検出しており、石室掘り方によって遺構の東半分が削平されている。

本遺構は斜面を「コ」の字形に段切りして形成しており、おそらく隅丸の方形プランをとると考えられる。規模は残存部で約4.6m×2.2mを測り、検出面からの深さは北壁際で25cmほどである。底面からは径35cm、深さ15cmのピットを1基検出している。遺構の埋土は自然堆積と考えられる。遺構内からは数点の土師器小片が出土しているが、図化可能なものはなかった。

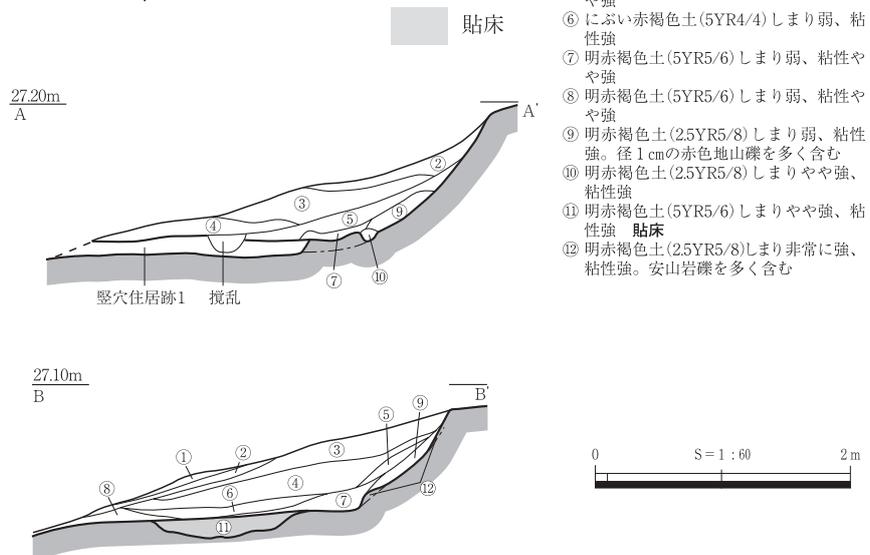
時期の分かる遺物が出土しておらず、遺物から遺構の時期を判断することができない。少なくとも28号墳よりは古いことから、古墳時代後期以前のものであることは確実である。また、段状遺構1と並ぶように検出されたことを考えると、段状遺構2の機能していた時期が段状遺構1のそれに近い可能性がある。



- ① 明褐色土(7.5YR5/6)しまりやや弱、粘性やや強 古墳盛土
- ② 明赤褐色土(2.5YR5/8)しまり・粘性やや強 古墳盛土
- ③ にぶい赤褐色土(5YR4/4)しまりやや弱、粘性やや強 古墳盛土
- ④ 黒褐色土～暗褐色土(7.5YR3/2～3/4)しまり弱、粘性やや強。径1～2cmの赤色地山礫を含む
- ⑤ 明赤褐色土(5YR5/6)しまり弱、粘性やや強
- ⑥ にぶい赤褐色土(5YR4/4)しまり弱、粘性強
- ⑦ 明赤褐色土(5YR5/6)しまり弱、粘性やや強
- ⑧ 明赤褐色土(5YR5/6)しまり弱、粘性やや強
- ⑨ 明赤褐色土(2.5YR5/8)しまり弱、粘性強。径1cmの赤色地山礫を多く含む
- ⑩ 明赤褐色土(2.5YR5/8)しまりやや強、粘性強
- ⑪ 明赤褐色土(5YR5/6)しまりやや強、粘性強 貼床
- ⑫ 明赤褐色土(2.5YR5/8)しまり非常に強、粘性強。安山岩礫を多く含む

段状遺構 3 (第68図、PL.62)

J 6グリッドの21号墳西側斜面部で、古墳盛土除去後に検出した。竪穴住居跡1と平面的に重複しており、竪穴住居跡1を大きく切っている。遺構の西側は21号墳古段階の西側周溝に掘削されており、本来のテラス平坦面の広がりが残っていない。また、遺構の北側は地山まで大きく掘削してしまった



第68図 段状遺構 3

ため、遺構北側の広がりや全体の形状は不明である。

本遺構は21号墳築造以前に、西側に傾斜する自然丘陵斜面を「コ」の字形に段切りして形成している。遺構の規模は残存部で長軸約4m、短軸2.5～3.2mで、おそらく隅丸の方形プランをとると考えられる。検出面からの深さは東壁際で60～80cmほどである。土層断面1～3層は21号墳の盛土で、4層以下は自然堆積の埋土である。

底面の東壁際で幅約10～20cm、深さ約5～10cmの壁溝を検出した。また、遺構底面の一部では貼床を確認した。貼床は、地山削平時に故意または偶然掘り込まれた10～15cm程の深さの不整形の窪みを埋めたもので、これによってテラス面が平坦に整えられている。

遺物は埋土4層を中心に土師器の小片・細片が20点ほど出土している。108は単純口縁甕の口縁部片である。小片のため時期決定が難しいが、古墳時代前期末から中期までの時期に収まるものと思われる。その他の破片も108と胎土・色調が近似しているため、同一個体である可能性が高い。これらの遺物が遺構の時期を示す可能性が高い。

4 集石(第69図、PL.63)

丘陵中央部の南斜面に築かれた28号墳の墳丘上及び周辺で、人頭大以上の礫の集石が4ヶ所確認された。いずれも土器などを伴っていないため時期不明であるが、湖山池東南岸地域の既出の事例から中世以降に帰属するものと想定される。礫は28号墳石室石材と同質の安山岩質凝灰岩または安山岩であり、中世以降露出した石室石材を利用して集石は築かれたものと考えられる。

集石1(第70図、PL.63)

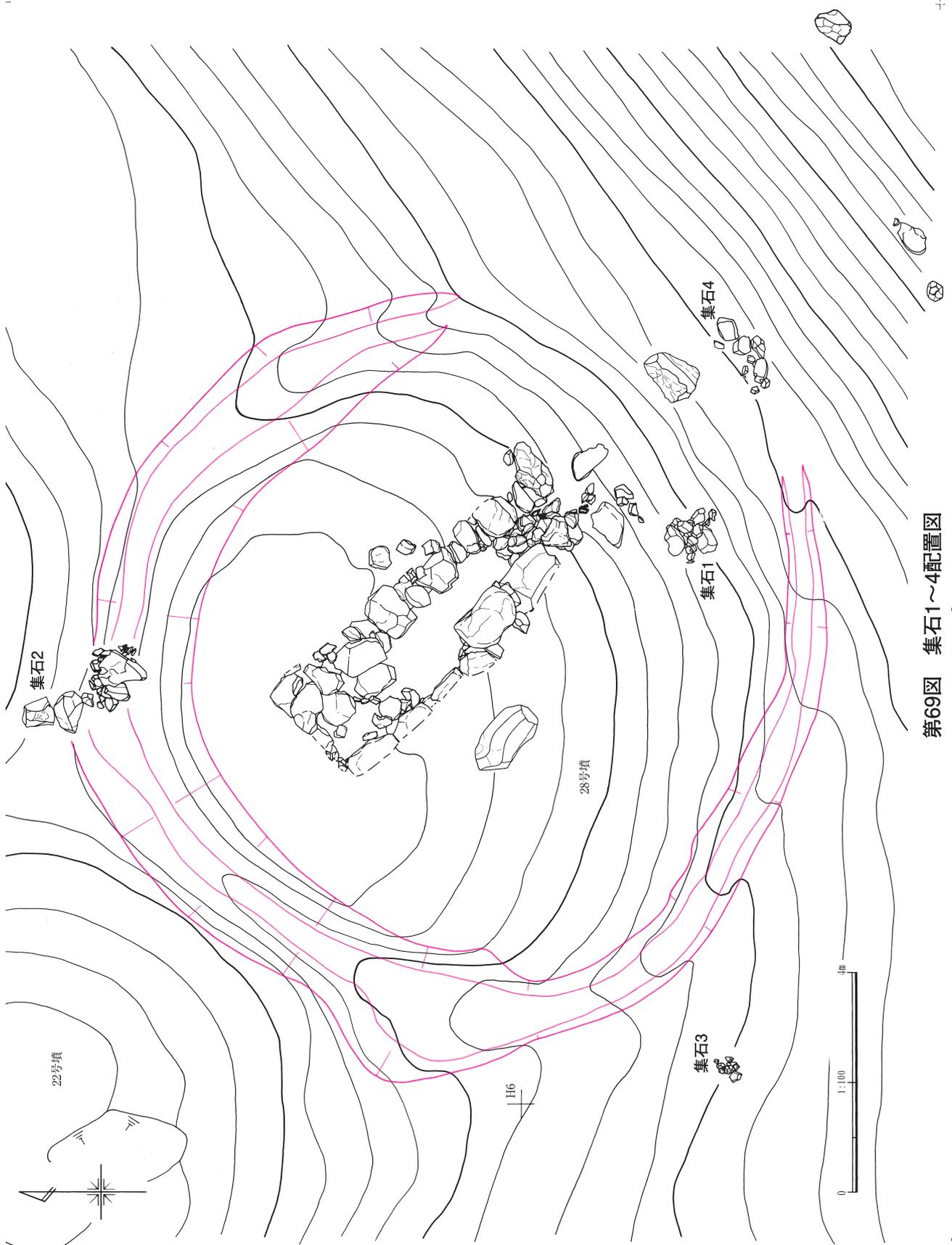
F6グリッド、28号墳墳丘南斜面に位置する。拳大から0.6mほどの礫が、長さ1m、幅0.8mの範囲に集中する。斜面の両端に大型礫を設置し、その間隙に中小型礫を積み重ねている。礫は安山岩質凝灰岩で、おそらく28号墳石室の石材を抜き取ったものと思われる。なお、掘り込みなどは認められなかった。

集石2(第71図)

G5グリッド、28号墳の北側周溝に重なり、周溝埋没過程に構築されたものと考えられる。0.1～0.2mの小型の扁平礫と0.6～0.8mの大型礫が、長さ2.4m、幅1.4mの範囲に集中する。とくに西側大型礫の周囲に小型扁平礫が集中する。礫は安山岩質凝灰岩で、おそらく28号墳石室の石材を抜き取ったものと思われる。掘り込みプランは検出されなかったが、西側の大型礫周囲には径1cmほどの炭化物が集中していたことから、火葬墓の可能性もある。

集石3(第72図、PL.63)

G6グリッド、28号墳の南西周溝外に位置する。拳大から人頭大の小型の扁平礫が長さ0.6m、幅0.3mの範囲に集中する。礫は安山岩質凝灰岩で、おそらく28号墳石室の石材を抜き取ったものと思われる。今年度の調査で確認された最も規模の小さい集石である。なお、掘り込みなどは認められなかった。



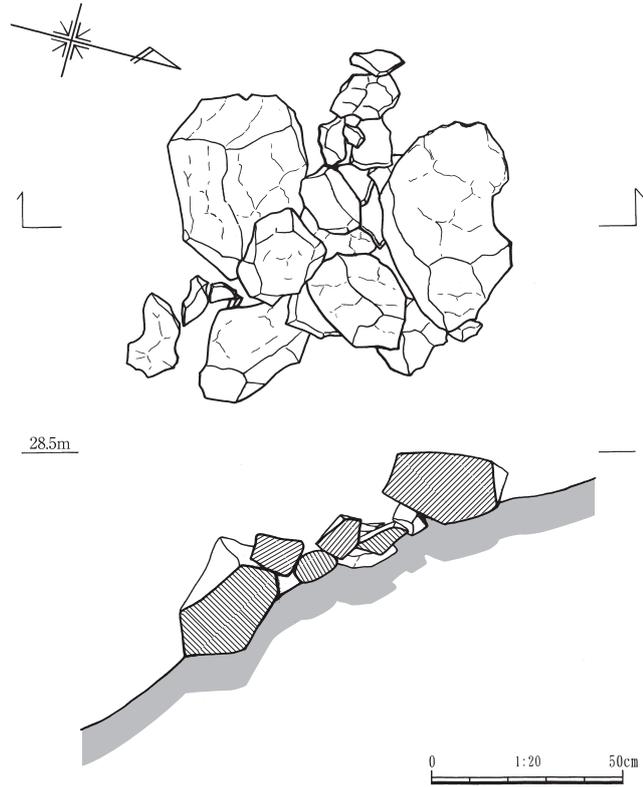
第69図 集石1~4配置図

集石4 (第72図、PL.63)

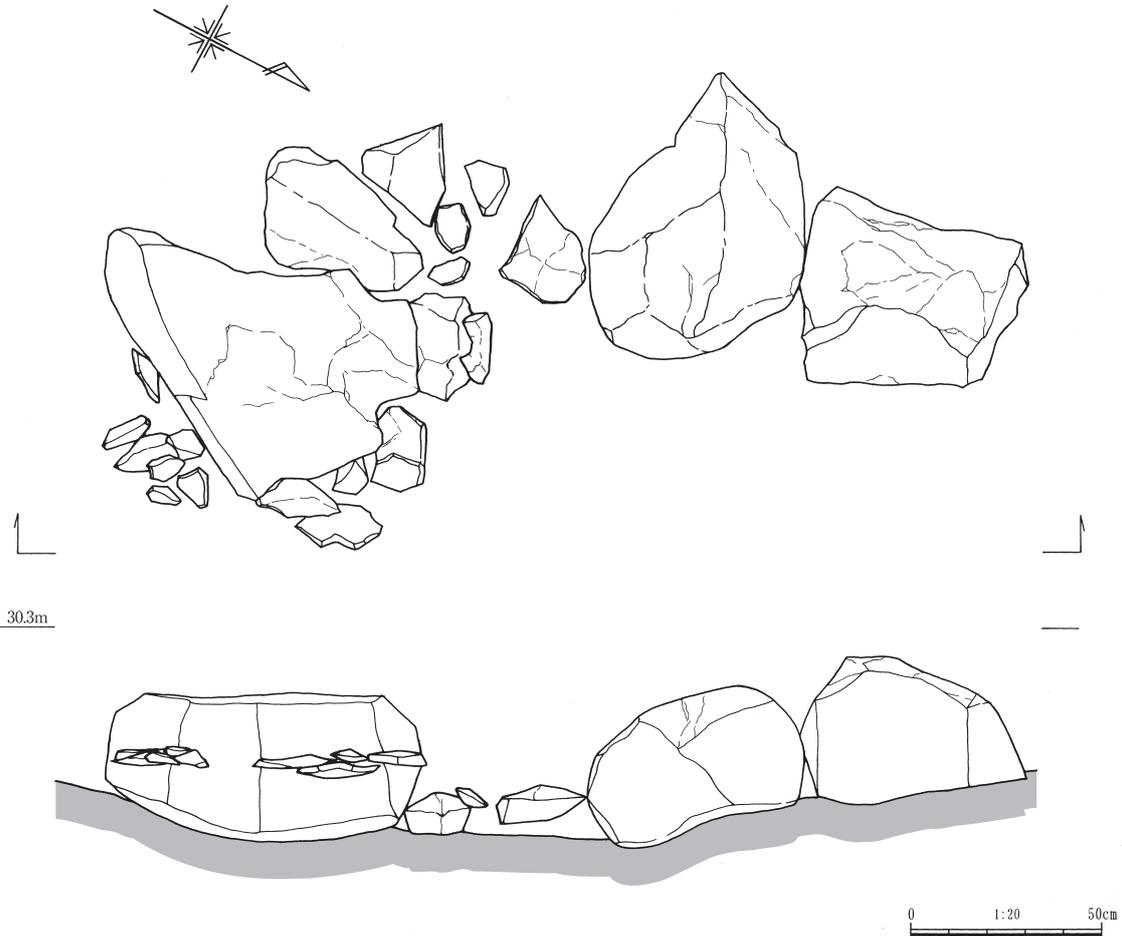
F6グリッド、28号墳の南西に位置する。0.1～0.2mの小型の扁平礫と0.6mの大型礫が、長さ1.9m、幅0.8mの範囲に集中する。礫は安山岩質凝灰岩で、おそらく28号墳石室の石材を抜き取ったものと思われる。掘り込みプランは検出されなかった。

テラス部の概要(第73・74図、表4、PL.94)

調査地のほぼ中央北端に位置し、北側谷部に面している。面積は約90㎡である。丘陵斜面を人為的に掘削して平坦面を築いた可能性が考えられる。テラス部からは、土坑7基、集石1基、埋設土器1基が検出され、これらの遺構に伴う遺物は非常に少ないが、包含層から出土した土師器(109・

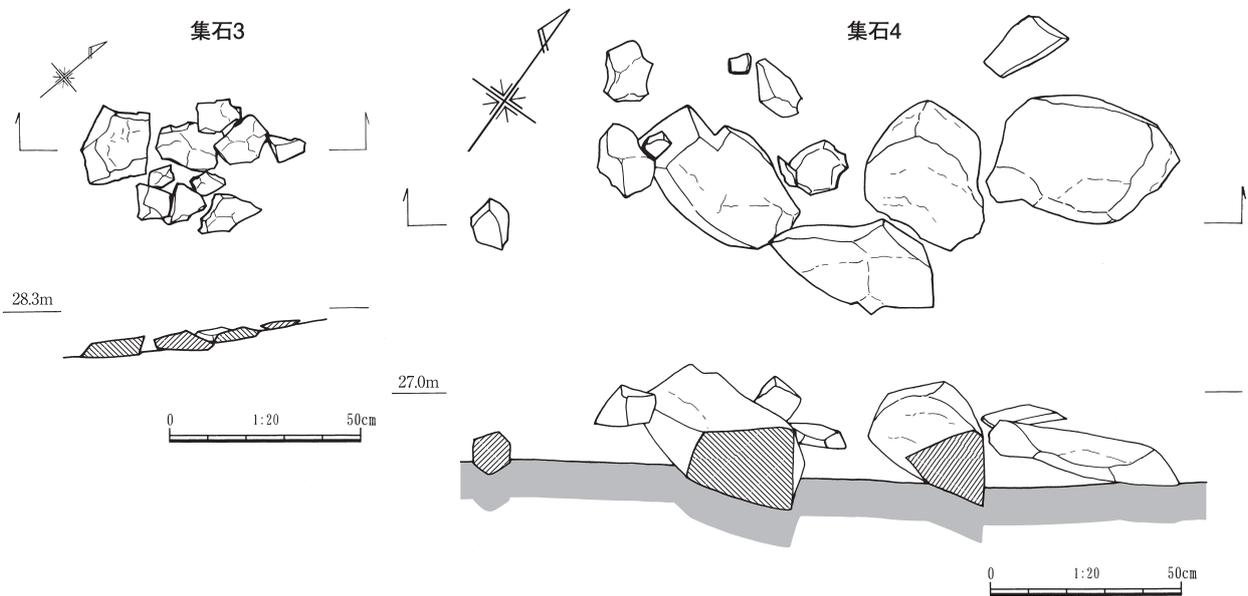


第70図 集石1

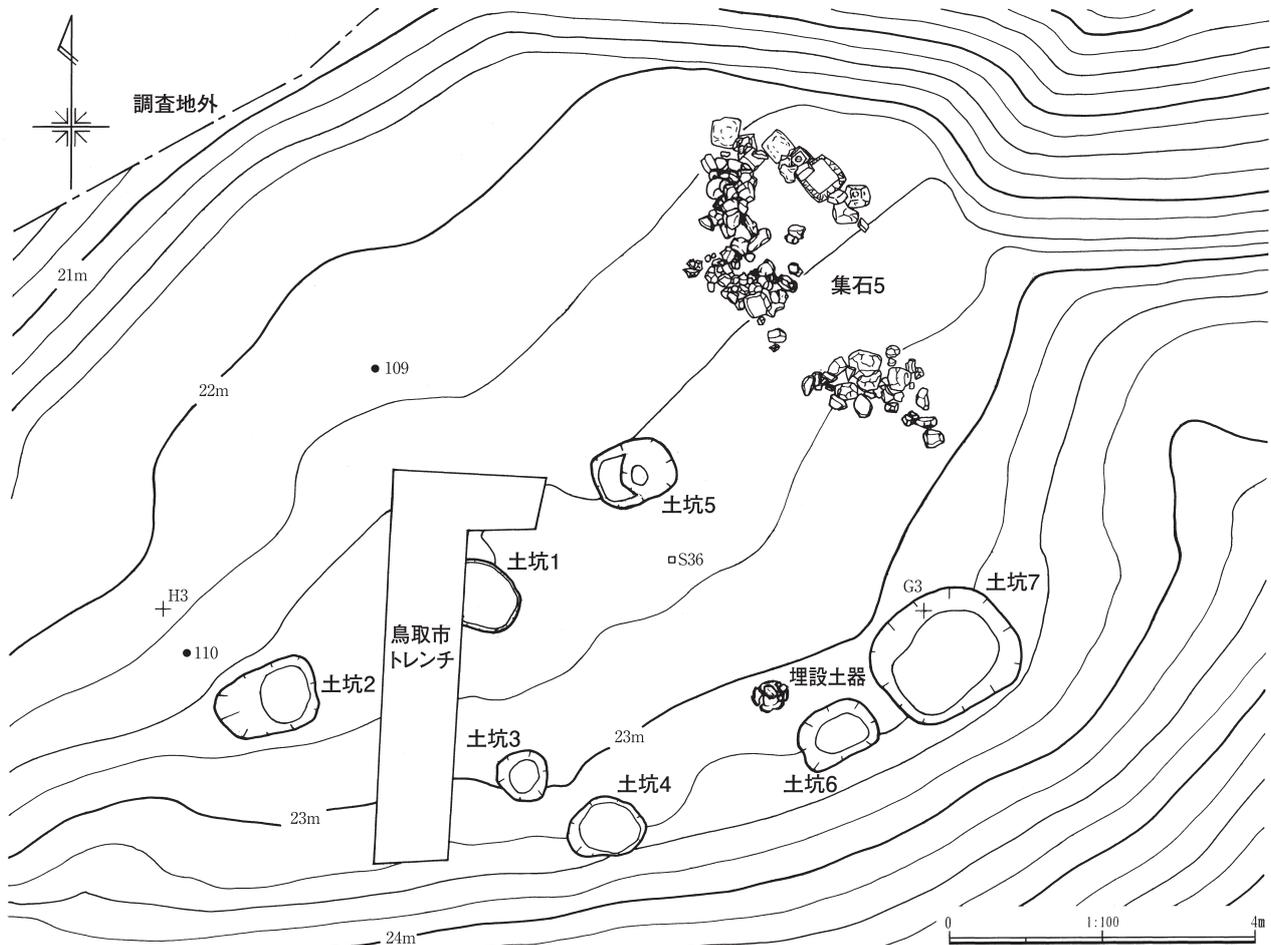


第71図 集石2

110) および集石に伴う五輪塔、宝篋印塔の型式学的検討から、13世紀～16世紀に比定される。109は器壁が薄く、指頭圧痕が残る京都系土師器皿である。110は硬質の焼成で器壁が高く、底部に回転糸切り痕を残す土師器皿である。以上のことからテラス部は、中世から近世の墓域と考えられる。



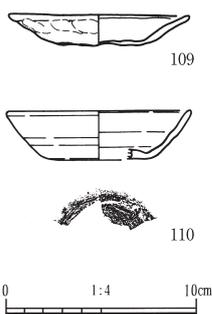
第72図 集石3・4



第73図 テラス部遺構配置図

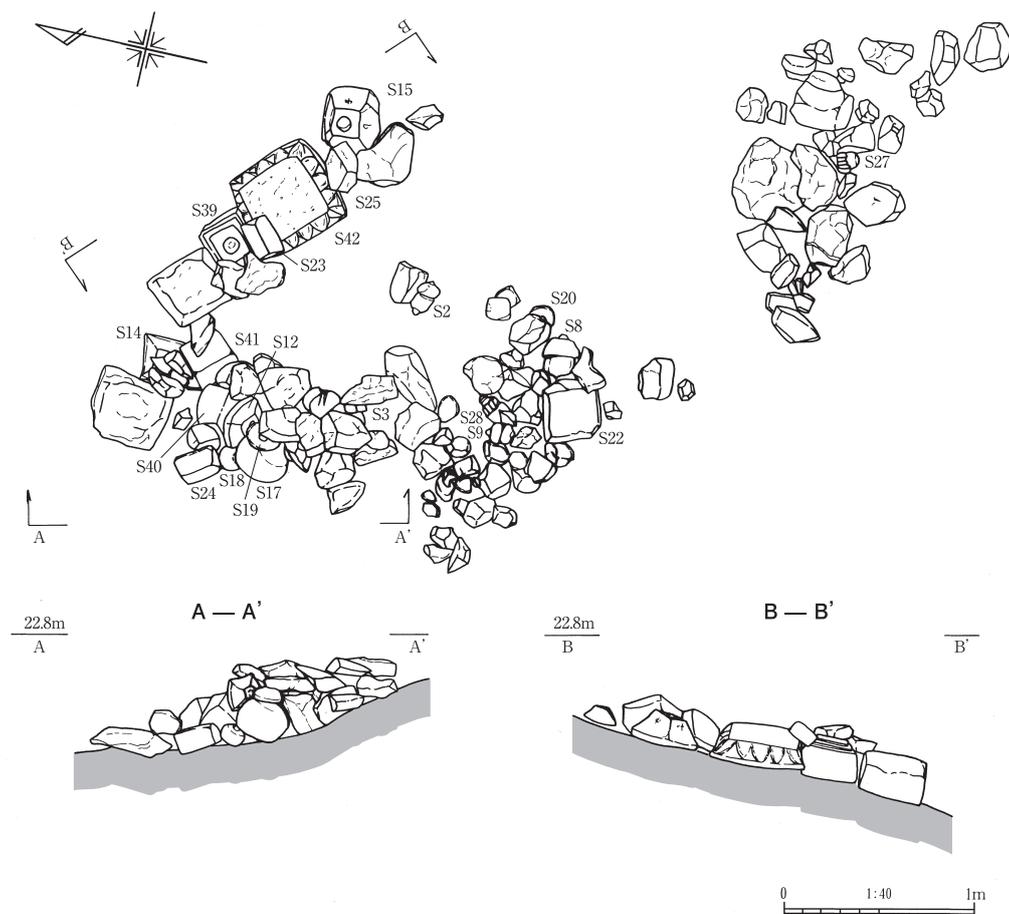
集石5 (第75～79図、表13・14、PL.63・64・87～92)

G2グリッド、テラス北東部に位置する。北側と南側の大きく2ブロックに分かれ、北側は長さ3.2m、幅2.5m、南側は長さ2m、幅1mの広い範囲に礫および五輪塔、宝篋印塔が散在する。北側には巨大な木の根があり、それを取り囲むような状態で石塔の部材が積み重ねられていた。南側には宝篋印塔の相輪1点(S27)が確認されたのみで、その他は人頭大の礫である。これらの石塔類は、本来尾根寄りの南側で構築されたものが、近世以降に取り壊され、北側谷部斜面へ向けて廃棄されたものと考えられる。

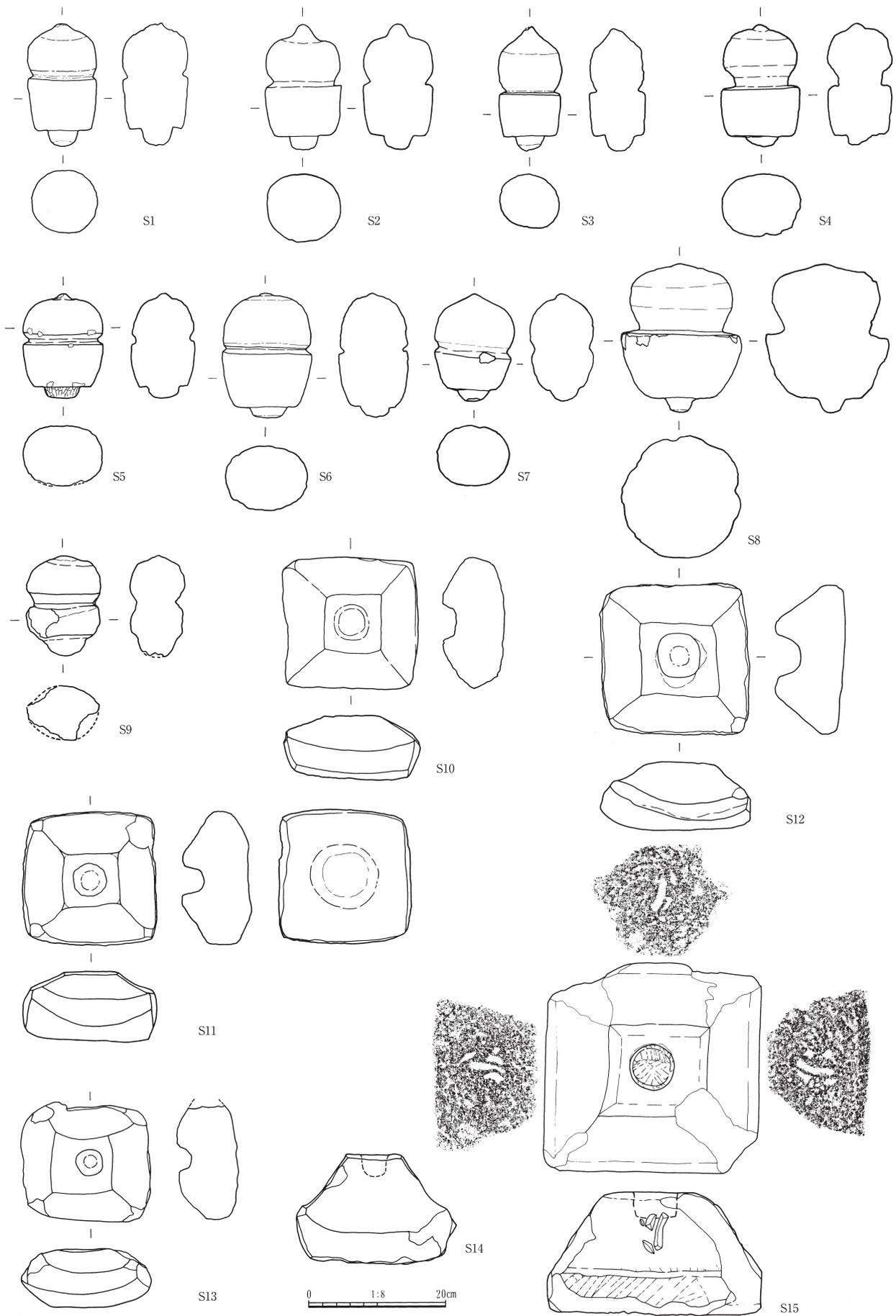


集積された状態で出土したものの内訳は、五輪塔の空風輪8点(S1～4、S6～9)、火輪6点(S10～15)、水輪5点(S16～20)、地輪5点(S21～25)、宝篋印塔の相輪3点(S27・28・30)、笠1点(S35)、基礎・基壇4点(S39～42)である。その他、表採および包含層出土の五輪塔として空風輪(S5)、地輪(S26)、一石五輪塔(S43・44)、宝篋印塔の相輪(S29)、笠(S31～34・36)、塔身(S37・38)があげられる。これらも合わせると、本来樹立されていた五輪塔はおよそ6～9基、宝篋印塔が4基と想定される。

第74図 テラス部出土土器



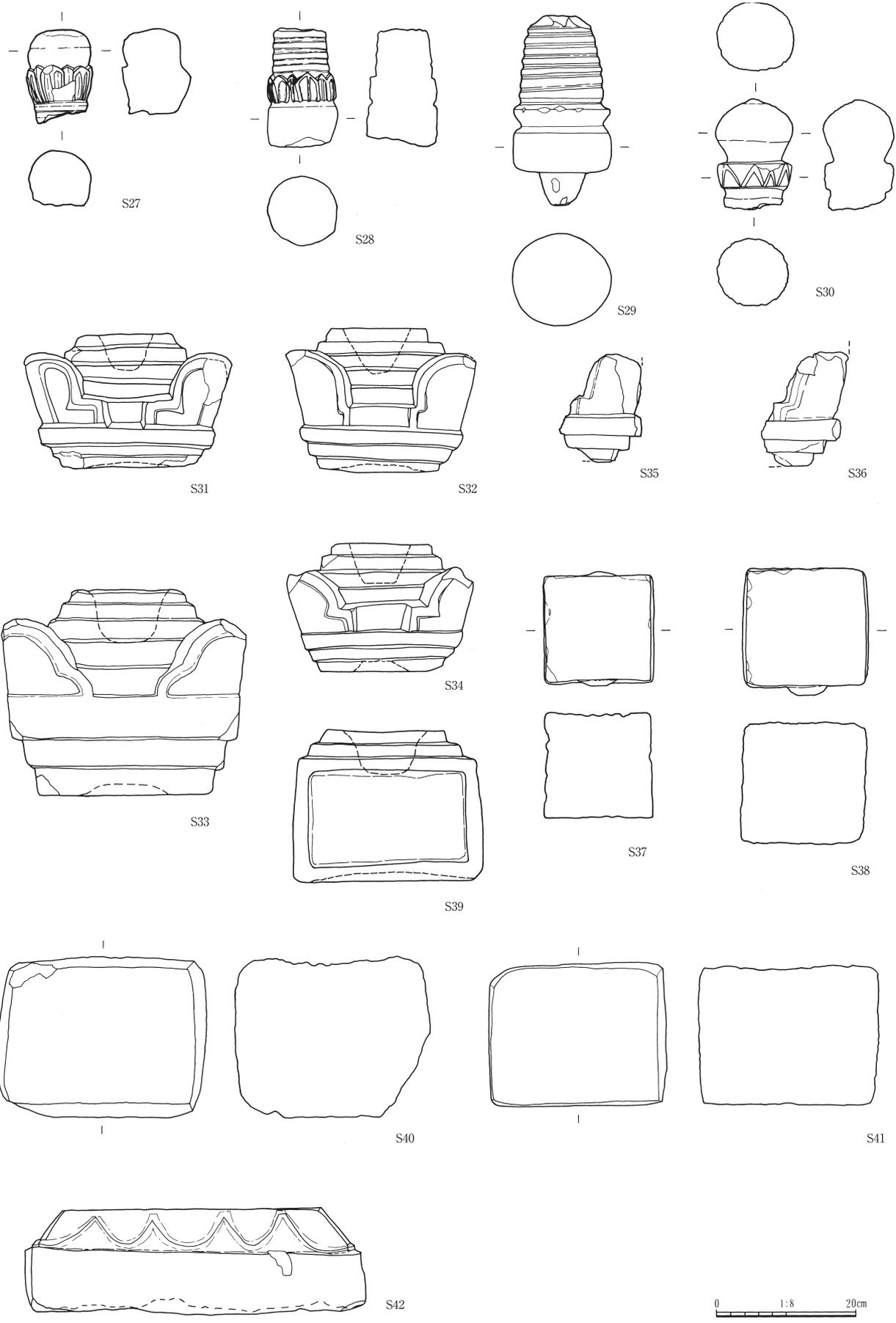
第75図 集石5



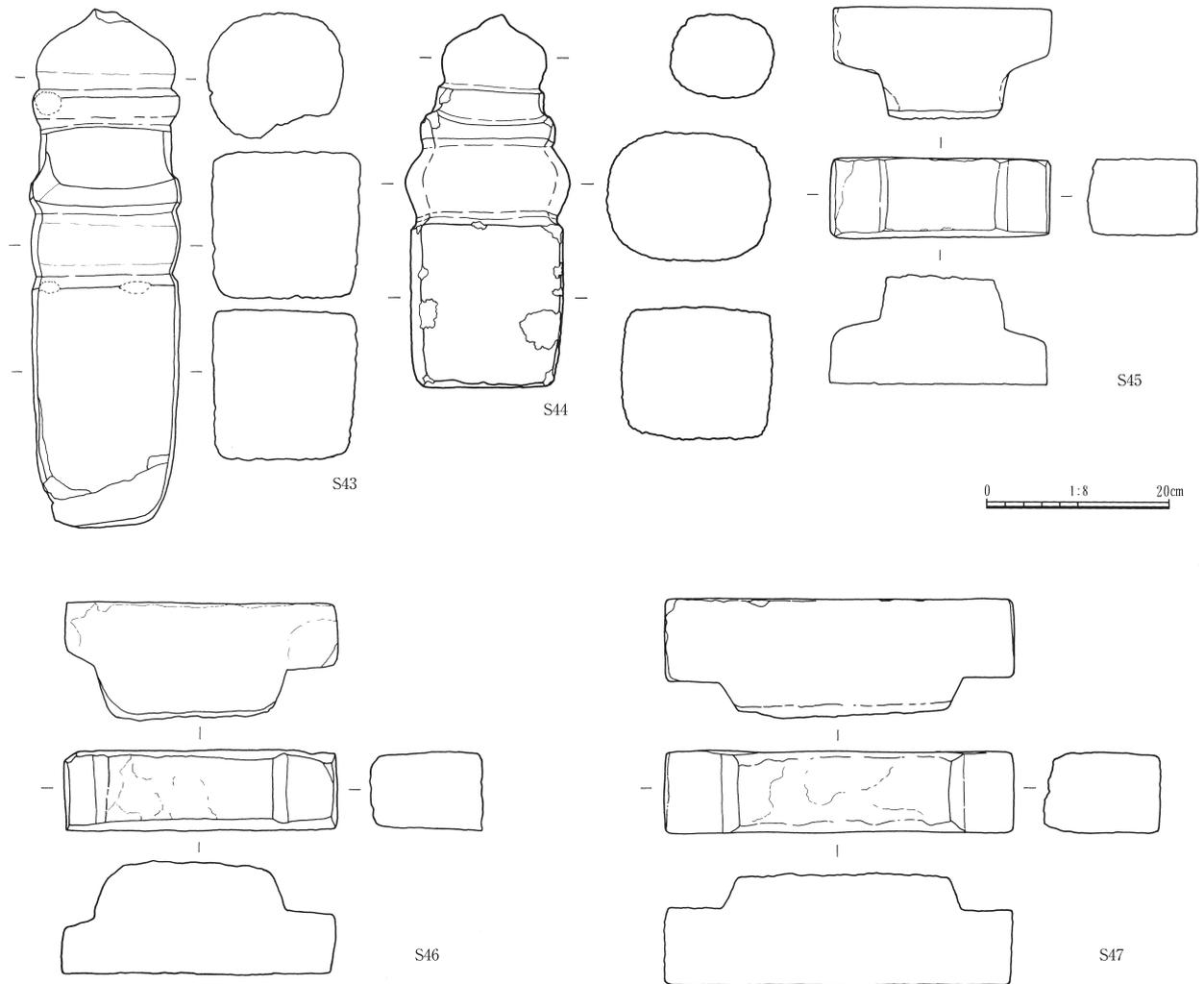
第76図 集石5出土遺物(1)



第77図 集石5出土遺物(2)



第78図 集石5出土遺物(3)



第79図 集石5出土遺物(4)

5 土坑

土坑1(第80図、PL.64)

G2グリッド、テラス中央部に位置する。西側の一部が試掘調査によるトレンチに切られているが、長径1.1m、短径0.95mの楕円形を呈している。深さは0.1mで褐色土が堆積し、上面には拳大の礫が方形に配置されていた。埋土が均質であり、礫の配置などから中世墓と想定したい。

土坑2(第80図、PL.64)

G3グリッド、テラス西端に位置する。長径1.4m、短径0.9mの隅丸方形を呈している。深さは0.15mで褐色土が堆積し、径1cm以下の炭化物や焼骨が含まれていた。埋土が均質であり、焼骨が含まれていることから中・近世墓であろう。

土坑3(第80図、PL.65)

G3グリッド、テラス南西に位置する。径0.65mの不整円形を呈している。深さは0.18mで地山礫を含む褐色土が堆積している。埋土が均質であることから、墓の可能性を想定したい。時期は不明である。

土坑4 (第80図、PL.65)

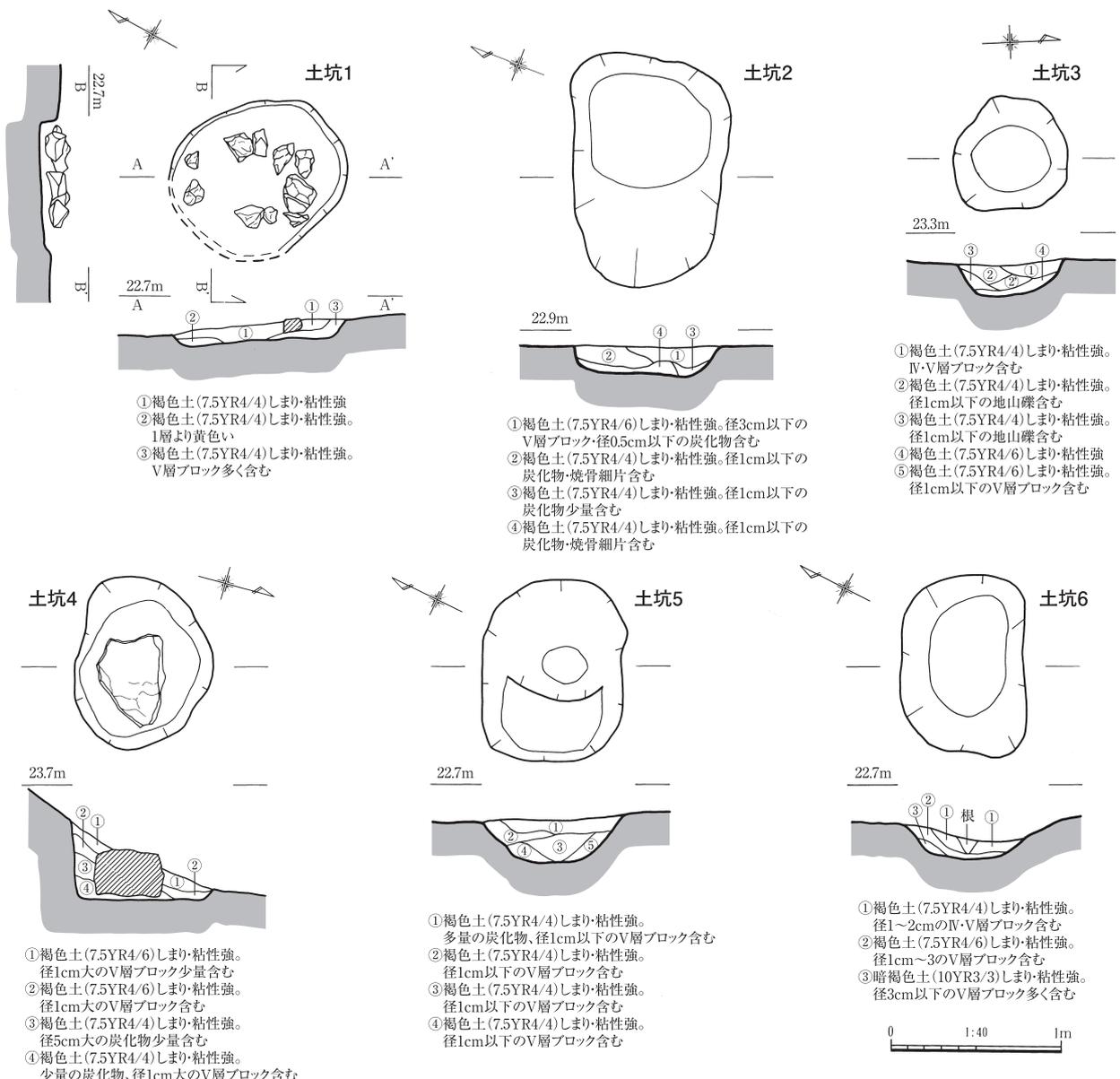
G3グリッド、テラスと丘陵斜面の変換点に位置する。長径1m、短径0.8mの不整楕円形を呈する。深さは0.4mで、地山ブロックを含む褐色土が堆積している。中央部には、長さ0.55m、幅0.4m、厚さ0.3mの礫が埋設されていた。おそらく、石塔の基壇の可能性がある。

土坑5 (第80図、PL.65)

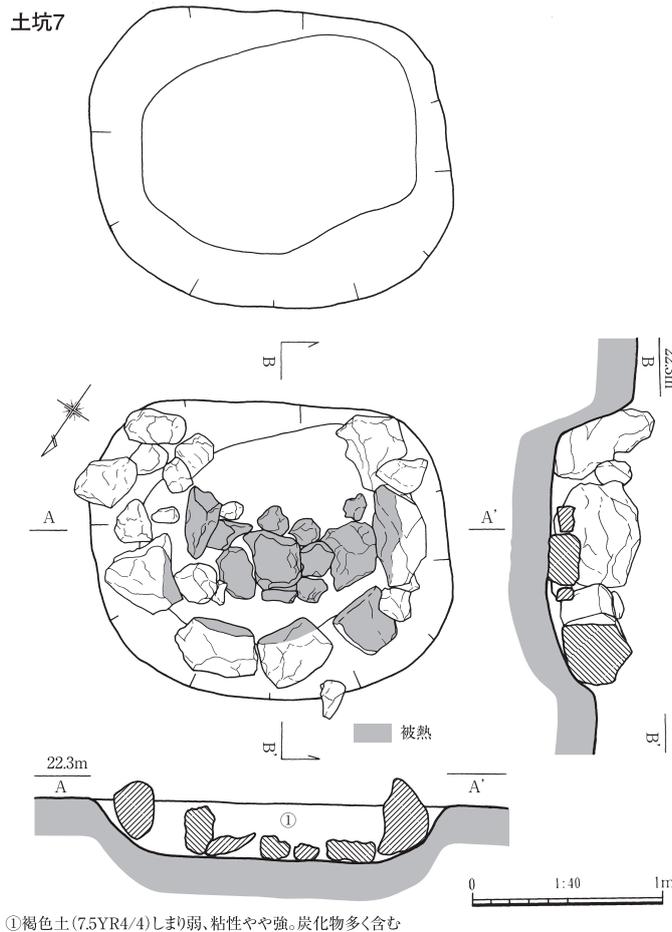
G2グリッド、テラス中央部に位置する。長径1.1m、短径0.85mの隅丸方形を呈している。深さは0.25mで西側にテラスをもつ。埋土は、地山ブロックを含む褐色土が堆積し、最上層には多量の炭化物が含まれている。埋土が均質であり、炭化物を密に含むことから、墓の可能性を想定したい。時期は不明である。

土坑6 (第80図、PL.65)

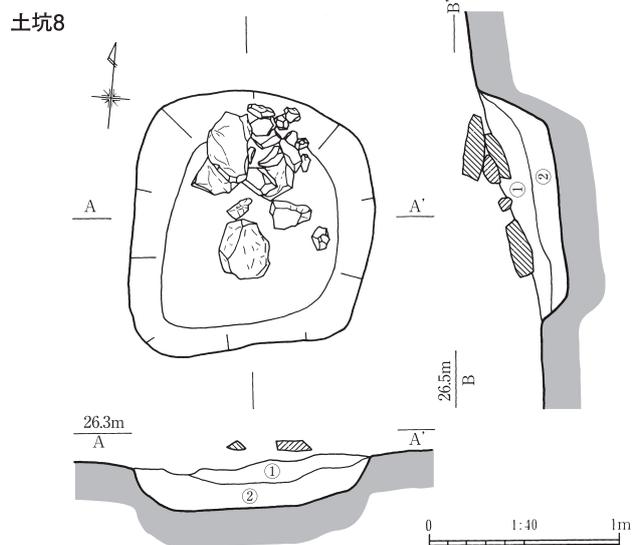
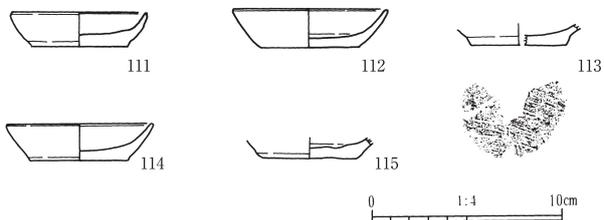
G3グリッド、テラス東南に位置する。長径1.1m、短径0.7mの隅丸方形を呈している。深さは0.2



第80図 土坑1~6



①褐色土(7.5YR4/4)しまり弱、粘性やや強。炭化物多く含む



①にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまり・粘性弱。径5cm以下の炭化物含む
②黄褐色土(2.5Y5/4)しまり・粘性弱。径1cm以下の炭化物、焼土粒少量含む

第81図 土坑7・8

mを測り、地山ブロックを含む褐色土と最下層の暗褐色土が堆積する。時期は不明である。

土坑7 (第81図、表4・5、PL.66・94)

F3・G3グリッド、テラス東南に位置する。長径1.9m、短径1.55mの隅丸方形を呈する、テラスでは最大規模の土坑である。包含層掘削過程で、遺構プランと壁際の礫を検出したため調査を進めた。土坑壁際と底面に厚さ約10～20cmの礫が配置され、礫の多くが強く被熱していた。掘り方までの深さは30cm、底面礫上面までは15～20cmである。埋土は、径1cm以下の炭化物を多く含んだ褐色土が堆積していた。出土遺物は、土師器皿(111～115)でいずれも表面が被熱している。113の底部には静止糸切り痕が観察される。

焼土や骨片などは認められなかったものの、礫が被熱していること、土師器皿が底面礫間や底面付近で出土していることから、茶毘墓もしくは焼場の可能性がある。出土遺物から13世紀代と考えられる。

土坑8 (第81図、PL.66)

G7グリッド、丘陵部南端の調査区際に位置する。表土除去後に礫を検出し、精査を行ったところ遺構プランを検出した。長径1.4m、短径1.3mの隅丸方形を呈している。深さは0.35mを測り、炭化物や焼土粒を含む黄褐色系の埋土が堆積している。埋土直上には厚さ10cmほどの扁平礫が積み重ねられていた。時期は不明であるが、中・近世墓の可能性はある。

土坑9 (第82図、PL.67)

J6グリッド、21号墳墳丘西端に位置する。古段階の墳丘盛土除去後に長楕円形のプランを検出し、精査を行った。長径4m、短径1.4